

Depuis toujours,
mais encore plus
depuis ma maladie,
j'ai tellement regardé,
j'ai tellement pris
des images en moi,
que une fois mort
il suffira de
placer des bagues
dans mon crâne
et diriger mes orbites
vers un mur blanc
pour qu'un cinéma
apparaisse !

「ずっと前から。病気になってからは、なおさら。私はあまりにも多くを見つめ、あまりにも多くのイメージを自分の内に取り込んできた。私が死んだら、私の頭蓋骨のなかに蠟燭を置き、眼窩を白い壁に向けてだけで、映画が現れる！」

亡霊たちのために部屋をつくる

Penser la peur

写真20点、2022年から2026年

「これらは私の部屋であり、私はそこへ帰ることができる。そこには、古くからあり、愛と友情によって新たにされてきた、私が結びついている家族という核の記憶が保たれている。」

JEAN-MARIE REYNIER、SANTA MARGHERITA、2024年

私たちはすでに蝸牛であり、すでに家である。

私は、人生において私たちがしていることは、家から逃れることだけだと固く信じている。家をつくり、そこから逃れる。家を出る。家を見つける。家を探す。順番は入り乱れる。人生で最良のことは、蝸牛になることなのかもしれない。あるいは、自分たちはすでに蝸牛であり、すでに家なのだと気づくことなのかもしれない。家は私たちとともに移動する。そこにはイメージ、死者、身振り、部屋、そして私たちが呼びつづける名前が運ばれている。

海であること、浜辺であること。浜辺から逃れ、岩を見つける。岩は魚に変わり、魚は頭蓋骨になる。頭蓋骨は幼い頃から私に寄り添ってきた。そこには恐怖、虚栄、身体、記憶が宿る。私はそれを家として、暗い部屋として、写真機として、私たちのビザンティウムとして見つめる。蝸牛の頭蓋骨、家としての頭蓋骨、暗室としての頭蓋骨。光、視線、時間が沈殿する空洞。写真はその空洞を開き、そこに一つの部屋を与える。

2021年以来、Penser la peur は数千点のイメージを集め、いくつもの小章を通して構成されてきた。人々、家、庭、病院の部屋、湖、浜辺、木々、ベッド、捨てられた物、背を向けた人物、ぼやけた顔、水の線、頭蓋骨が、記憶の宮殿の各室を占めている。イメージは戻り、場所を変え、別のイメージを呼び寄せる。それらは、生者、不在の者、場所のあいだに通路を開く。写真を撮るたびに宮殿の構造は動き、一つの部屋が広がり、一つの扉が閉ざされ、ある部屋の記憶が別の部屋に浮かび上がる。

写真は一瞬を留める。その瞬間を貫いた感情の経験は、消えてゆく運命をたどる。私はその距離のなかで仕事をしている。消えゆくもののために小さな部屋をつくるため、亡霊たちに部屋をつくるため、現れに居場所を与えるために写真を撮る。これらのイメージは、古くからあり、愛と友情によって新たにされた家族という核の記憶を守る。私たちが共にいた場所を保存し、私をそこへ戻してくれる。この家の内側で、私は感謝があるべき場所に置く。場所へ、身振りへ、言葉へ、イメージへ、名前と顔へ、友人へ、彼らが抱える痛みへ、子どもたちへ、親たちへ、家族へ、女性の師たちへ、男性の師たちへ、美学を除くすべてへ。愛に感謝する。ありがとう。























「原初の暗室。」

01

「2021年以来、レニエは数千点の写真を制作してきた。 […] この五年間、写真は彼にとって芸術家としての歩みを再定位するための道具となり、自らの実存の軌跡を遡る旅を成し遂げる手段となった。」

02

「オリジナルのプリントは、その同じ浜辺の砂のなかへ差し込まれている。作家は2025年、幼年期と現在を直接結ぶ構図をつくるという明確な意図を携え、再びその場所を訪れた。この入れ子状の構造は、レニエが写真の被写体から作者へ移る過程を示し、彼自身の視線を父ジャンと母コゼッタの視線に絡ませる。」

03

「Penser la peur は、ヴァニタスの伝統に含まれる儚さへの瞑想を越えようとする欲望から生まれた。このシリーズを通じて、作家は写真という行為の本質を問いかける。写真は一瞬を捉える。その瞬間を貫いた感情の経験は、やがて消えてゆく。」

04

「この観点に立つと、頭蓋骨はメメント・モリとしての役割を離れ、写真機に対応する人間的な存在、原初の暗室となる。 […] ジャン＝マリー・レニエは、イメージが眼窩の底に沈殿する前に、できる限り多くを捉えようとしているかのようだ。」



















写真20点

01 Les Fascistes, Penser la peur, 2022

02 Penser la peur, 2023

03 Penser la peur, 2024

04 Penser la peur, 2026

05 Contra Ornamenta, 2025

06 Santa Margherita, 2024

07 Santa Margherita, 2025

08 Torino, 2025

09 Camargue, 1983-2025

10 Tokyo, 2025

11 Penser la peur, 2024

12 Penser la peur, 2026

13 Pays d’Enhaut, 2026

14 Pays d’Enhaut, 2026

15 Léman, 2026

16 Penser la peur (Un dimanche), 2023

17 Penser la peur (Enguerrande), 2024

18 Penser la peur, CHUV, 2024

19 Nature morte avec crâne et pichet

20 Penser la peur (Enguerrande), 2024

Jean-Marie Reynier

1983年8月27日、ルガーノ生まれ。ジャン＝マリー・レニエはスイスのペロワを拠点に活動している。美術家、キュレーター、出版者。ルガーノのCSIA、サン・プレのAtelier de Taille Douce、ジュネーヴ造形芸術大学HEADのCCCプログラムで学ぶ。1997年以来、スイス国内外のオルタナティブスペース、ギャラリー、美術館、文化機関で作品を発表している。作品は複数の個人コレクションおよび公共コレクションに収蔵されている。

2021年以来、写真が彼の実践の中心を占めている。Penser la peur は、記憶、つながり、日常、病、消失、死をめぐる数千点のイメージを、複数の小章として構成するプロジェクトである。レニエは2025年からFondation Bugnonの芸術監督兼執行責任者を務め、Anankéの芸術監督、出版者、美術批評家としても活動している。

連絡先

www.thereynier.com

ceo@thereynier.com

+41763571514

@jeanreynier

Scappato di casa

最新展覧会の展示風景

Scappato di casa

Casa Pessina、Musei di Mendrisio

Ligornetto

2026年5月31日から7月5日

キュレーション フランチェスカ・ベルナスコーニ

展覧会関連刊行物

Scappato di casa

写真 ジャン＝マリー・レニエ

テキスト ジャック・コルマリー

論考 フランチェスカ・ベルナスコーニ

デザイン ヴェラ・ビアンダ







